



朗読音声のダウンロード
Audio download

LEVEL
5

Web
Tadoku
Books

★読み前に Before you read

《多読の読み方》

たどく よ かた
多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。
次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

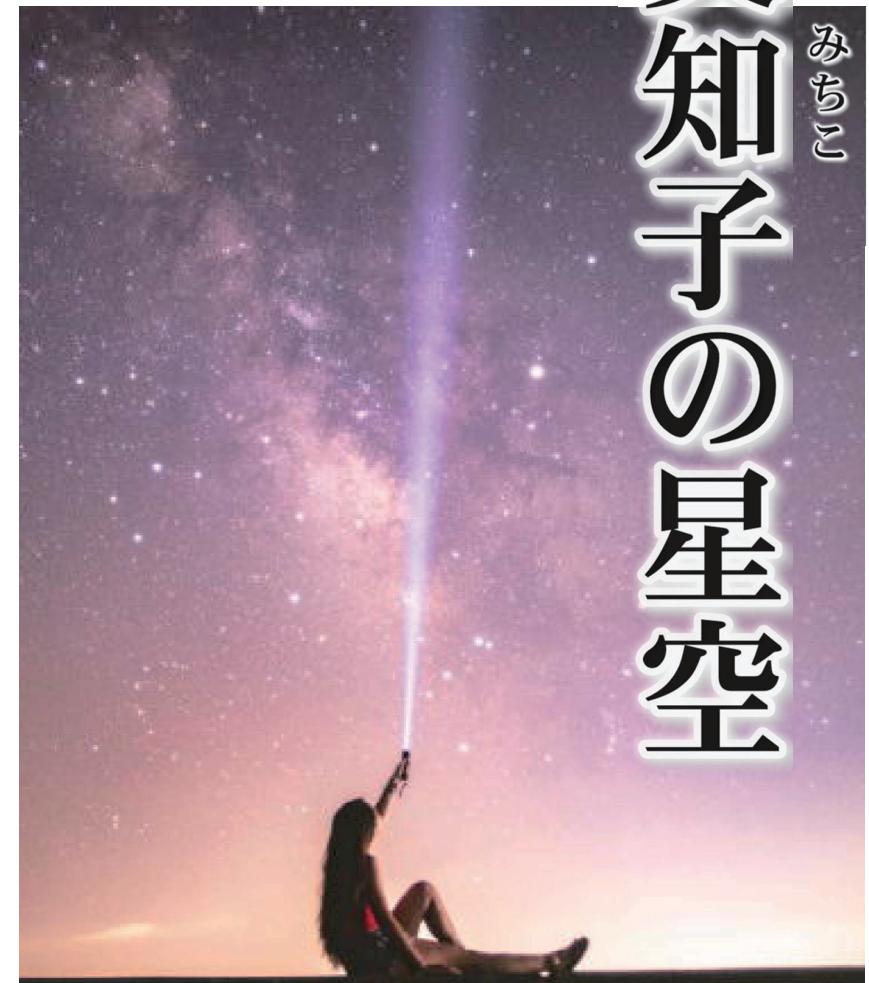
1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



原作 おおつか
大塚えみ
翻案 ほんあん
川本かず子

美知子の星空

みちこ

一 クラス会

今年も、もうすぐクリスマス。駅前通りは、イルミネーションがキラキラと輝いている。歩いている人たちの顔も楽しそうだ。美知子は高校のクラス会に向かっていた。

——もうすぐクリスマスか・・・。みんな楽しそう。私は、今年もまた、一人で過ごすんだろうなあ——
にぎやかで明るい町を歩きながら、美知子は、そんなことを思った。



美知子二十五歳。今の会社に就職して三年。毎日、八時に家を出て満員電車で会社に行く。毎日、同じような仕事をして、また満員電車で家に帰る。高校、大学時代は好きな人もいたし、まあまあ楽しかった。でも、就職してからの美知子は、自分の選んだ仕事に満足していなかつたし、恋人もいない。そんな時、友だちに誘われて、卒業してから初めて高校二年の時のクラス会に行くことにした。
——大学進学や就職のために、一緒に頑張った仲間たちに会える。うれしいけれど、みんな、すごく変わつてたら、どうしよう——

店は、思つたより駅から近かつた。美知子は、ちよっぴり不安を感じながらドアを開けた。

店内には、懐かしい顔がいっぱいだ。コートを脱いで席に着こうとした時、声がした。
「お！ 美知子、久しぶり！」
「あ、広志」
「美知子、ここ座れよ」

「あ、うん、いいよ」
広志は美知子の隣に座った。

「——広志、私の名前、覚えていてくれたんだ——」

美知子は、高校の時、広志のことが好きだった。広志はサッカー部のキヤブテンでかつてよく、人気者だった。広志の周りには、いつもかわいい女の子が集まっていた。美知子は美術部だった。美術室で絵を描きながら、校庭でボールを追いかけ走り回る広志を見ているだけでドキドキした。

「え？ 本当に？」

「うん、きれいになつたよ」

「ありがとう」

広志にじつと見つめられ、美知子は恥ずかしくなつて下を向いた。

「——美知子、かわいいじやん、こんなかわいかつたかなあ——」

広志がそう思つた時、サッカー部だった一郎が声をかけてきた。

「やあ、広志」
すると、人気者の広志の周りに、次々に友だちが集まつてきた。

「よ、広志」
「ひろし
「広志、久しぶり」
「ひろし
「広志、こつち来いよ」
「ひろし
「広志を真ん中に、にぎやかで大きなグループができました。」

美知子は、広志がいなくなつた席に一人で座つていた。
そこに、美術部で仲の良かつた友だちが何人か来て声をかけた。
「美知子、久しぶり」
「美知子、元気だった？」

「うん、きれいになつたよ」
「え？ 本当に？」



美知子の周りにも、小さなグループができた。
クラス会が終わって、美知子が店を出ると、

「みちこ
美知子」

と、先に店を出ていた広志が呼んだ。

「けいたい
携帯の番号、教えろよー」

「え？」

「だめ？」

「ううん、いいよ、もちろん」

広志のマフラーが風で揺れた。雪が降つてきそうな寒い夜だつた。
広志、二十五歳。大学でもサッカー部だった。大学卒業後、サッカーの経験を活かしてスポーツ関係の会社で働いている。おしゃれでかつこよく、雑誌の読者モデルになつたこともある。給料はほとんど服や飲食に使つている。

次の日、会社から駅へ歩きながら、美知子は、クラス会で広志に声をかけられたことを思

い出していた。その時、携帯電話が鳴つた。広志からだつた。美知子はドキドキして電話に出了た。

「もしもし」

「あ、美知子？」

「うん」

「広志だけど」

「こんばんは」

「あのさ、今週、会いたいんだけど、空いてる日ある?」

「え? ちょっと待つてね」

美知子は、カバンから手帳を出した。

「えーと、木曜が空いてる」

「お! 僕も空いてる。飲みに行こうぜ」

「え、うん、いいよ」

「ええと、新宿でいい?」

木曜日の夜 美知子は、会社を出る前に、いつもより時間をかけてお化粧を直した。
——あの人気者の広志と一人で会う？ 高校時代には考えられなかつたことだ——
二人は新宿で会つた。

広志は、ステツ姿だった。

——ステツの広志も、かついいなあ——

広志おすすめの蕎麦屋で食事をした後、夜景の見えるバーに行つた。
満月が明るく輝いていた。

二杯目のカクテルを、美知子が飲み終えると、広志が言つた。
「美知子、俺と付き合わない？」

「え？」

美知子は、驚いて言葉が出なかつた。美知子は、広志の目をじつと見つめた。
「俺と付き合うと、毎日、面白いよ」

広志が笑顔で言つた。美知子は笑つてしまつた。

「じゃあ、よろしくお願ひします」



「うん、いいよ」
「じゃあ、七時に新宿南口で」
「うん、わかつた。七時に新宿南口ね」
「うん、じやあな」
「うん」

電話を切つた後、美知子は、空を見上げた。
夜空に一つ、とても明るく光る大きな星があつた。
美知子は、その大きな星にお願いをした。
——今年こそ、いいことがありますように——
そして、胸いっぱいに息を吸つた。



「わあ！ きれい！」
花束は大きくて広志の顔が見えなかつた。
「広志、ありがとう！」
——なんて素敵なクリスマスなんだろう！——
美知子は幸せだつた。

その時、広志の声がした。

「み 知子、メリーカリスマス！」

戻ってきた広志は、赤いバラの大きな花束を持っていた。

「わあ！ きれい！」
花束は大きくて広志の顔が見えなかつた。
「広志、ありがとう！」
——なんて素敵なクリスマスなんだろう！——
美知子は幸せだつた。

と言つた。

コーヒーを飲み終わると、広志がどこかへ行つた。美知子は、広志を待つてゐる間、夜景を眺めていた。

——今年のクリスマスは、広志と一人なんて、信じられない——



クリスマスは、横浜のおしゃれなレストランを
広志が予約してくれた。
美知子の席から、横浜ベイブリッジが見えた。
夜の海に船が浮かんでいる。船の明かりが海に映つて揺れている。
「うん、とてもきれい」「料理もおいしいだろ？」
友だちなんだよ」「うん、とてもおいしい。料理長は、俺の
「そう」料理長が二人の方を見て手を振つていた。美知子も手を振つて、「お料理、とっても、おいしいです」

広志と付き合つて美知子は変わつた。

金曜日の夜は、広志と渋谷や六本木のクラブへ行つて、お酒を飲んで踊つた。

「みちこ、そのミニスカート可愛いよ」

「ほんと？ 短すぎない？」

「うん、おれは好きだな」

「ありがとう」

「お？ 髪型も変えた？ いいね」

「わかる？」

「もちろん、わかるよ、色も変えただろ？」

「うん、ちょっとだけね」

「みちこ、どんどん可愛くなつてるよ」

美知子の髪は、明るい茶色になつていた。

美知子は、広志と付き合つて前は、ミニスカートを

買ったことも、髪を茶色にしたこともなかつた。クラブに行つて、踊つたこともなかつた。

美知子は、店の鏡の中の広志と自分の姿に満足した。

二 迷い

広志と付き合つて、半年が過ぎた。

その日、美知子と広志は、イタリアンレストランで夕食を食べていた。

コーヒーを飲んでいると、広志の携帯電話が鳴つた。

「もしもし？ どうした？ 明日の夜？ 大丈夫だよ。わかつた。七時に駅前で。じゃあ

「今の電話、誰から？」

「幸だよ」

「幸つて誰？」

「前の彼女」

「え？」

「言ってなかつたつけ？」

「知らない」

「何か相談があるみたいで」

「それで、明日会うの？」

「うん」

「幸さんとは別れたらどう？」

「別れても友だちだからさ」

「友だち・・・」

「美知子も友だちが相談あるって言つたら、会うだろう？」

「そうだけど・・・」

その夜、美知子は、広志と幸のことが気になつて、なかなか眠れなかつた。

次の日から、広志は仕事で大阪へ行つてしまつた。

美知子は、それから毎晩、一人でクラブへ行き、お酒を飲んで踊つた。家に帰つて、美知子

は鏡を見た。鏡の中には、疲れた顔の美知子がいた。

——これが私？ううん、私じゃない。こんな生活、楽しくないよ——



広志が帰つてきたのは一週間後だ。

「幸さんは、何の相談だつたの？」

「仕事が忙しくて疲れてたから、俺と飲みに行きたかったんだつて」

「広志じやなくてもいいのに」

「俺じやなきや、だめなんだよ」

「別れたのに、仲がいいね」

「美知子には、俺と幸の関係がわからないだろうなあ」

「うん、わからない」

「俺も疲れた時、幸といふと元気になるんだよね」

「・・・」

「でもな、幸は忙しくても、疲れてても、楽しそうなんだよなあ」

「・・・」

次の日、美知子は広志の言つた言葉を思い出した。

——『幸は、忙しくても、楽しそうなんだよなあ』——

幸は、ファッショ nの学校を卒業して、有名なファッショ nブランドで働いている。

美知子は、そんな幸と自分を比べた。

——幸さんは、仕事を楽しんでいる。私は仕事を楽しんでいるだろうか？ 私が心からやりたい仕事は何だろう？——

それから、美知子は、毎日、自分のやりたいことは何か、考えるようになった。

子どもの頃、美知子は、夏休みになると、おばあちゃんの家へ遊びに行つた。おばあちゃんは、畑で野菜を作っていた。トマト、キュウリ、ナス。畑の野菜はみんな、とてもおいしかった。こんなにおいしい野菜を作れるおばあちゃんはすごいなと思った。それから、美知子は、自分で野菜を作ることに興味を持った。美知子は



今、家の小さなベランダで、トマトとナスを育てている。

でも、もつと大きな畑で、野菜をたくさん作つてみたかった。土や風、太陽、そんな中で働くたら楽しいだろうなと思い始めた。それに大好きだった絵もずっと描いていないことに気づいた。

——私がやりたいことは、何だろう？ 野菜を作ること？ 自然の中で働くこと？——

美知子は広志に、これからのこと話を話してみることにした。

「広志、私の話を聞いてくれる？」

「いいよ。何？」

「あのね、自然の中で働くってどう思う？」

「え？ 自然の中で？」

「うん」

「何をしたいの？」

「畑で野菜を作りたいの」

「え？ そんなの疲れるだけだよ」

「今の仕事だつて疲れるよ」

「今の会社に慣れてきたんだろう？」

「うん、慣なれてはきたけど・・・」

「じや、続ければいいじゃない」

「でも、今の仕事、楽しくないから」

「野菜作るのは楽しいの？」

「うん、きっと楽しいと思う」

「そうかあ？ 僕おれはそうは思わないけど」

——広志は、わかつてくれなかつた。でも、私は、やつぱり自然の中ではたらいてみたい

それからも、美知子は、広志と遊んでいても、会社にいても、いつも自分のやりたいこと

を考えていた。自然の中ではたらいてみたいという思いがどんどん強くなつていつた。
美知子と広志が付き合つて、もうすぐ一年が経つ。美知子は、外出することも楽しいけれど、たまには、家でゆつくり料理を作つて、休日を過ごしたかった。

「明日の夜、広志の家へはんを作りに行つてもいい？」

「明日は土曜日だし、家で食べる気分じやないな」

「そう」

「俺おれ、表参道に新しくできたピザ屋に行つてみたいんだよ」

「ピザ屋？」

「チーズにハチミツがかかつた。ピザがおいしいんだつてさ。行つてみようぜ」

「・・・わかつた」

広志は、いつも自分の思った通りに決めてしまう。

次の日の昼頃、広志から電話がかかってきた。

「美知子、ごめん。今日、会えなくなつた」

「え？ どうしたの？」

「入院している友だちのお見舞いに行くことになつたんだ」

「突然だね」

「今日しか行ける日がなくて」

「・・・わかつた。じゃあ、また今度」

「ごめんな」

――いつも 私が広志に合わせてばかり。服も髪型も広志の好みに合わせてる…。
わたし、何か無理しているんじやないかな?――

外は晴れている。美知子は、原宿へ買い物に行くことにした。休日の原宿は、若者たちがたくさん集まり、にぎわっていた。

美知子は、自然に関わる仕事を探し始めていた。本屋に入り、雑誌を読んでいると、西表島のさとうきび刈りのアルバイト募集を見つけた。

――わあ、きれいな所！ 西表島だつて。へえ、さとうきび畑だ。さとうきび刈り、

美知子は、雑誌を買って本屋を出た。日が暮れて、お腹が空いてきた。表参道まで来ていたので、美知子は広志の行きたがつていたピザ屋へ行ってみることにした。

そのピザ屋は人気があり、寒いのに、外で待つている人もいた。

――やつぱり、また今度 広志と一緒に来よう――

そう思つて帰ろうとしたら、窓際の席に広志がいるのが見えた。

――あれ？ 広志？ 病院へお見舞いに行つているはずなのに、なんで？あれ？ 女の人と一緒にいる。あの人、幸さんだ！――



美知子は、広志の家で、幸の写真を見たことがあったので、覚えている。

美知子は、店から離れて、広志に電話をかけた。広志は、店の外へ出てきて、電話に出た。

「もしもし？」美知子、何？」「

「広志、今、どこにいるの？」

「病院だよ」

「友だちと一緒に？」

「一人だよ。病院だから、長く話せないんだ。また明日、俺から連絡するよ」

広志は、そう言って電話を切ると、幸のいるテーブルに戻り、楽しそうに話し始めた。広志は、美知子に嘘をついていたのだ。

次の日、家でコーヒーヒーを飲みながら、雑誌を読もうとした時、広志から電話がかかってきた。

「昨日はめんな。これから会える？」

「会えない。表参道のピザはおいしかった？」



「え？」
「昨日、ピザ屋に一人でいるのを見たよ」「誰と？」
「幸さんと」「俺に似てる人だつたんじゃないかな？」
「広志だつたよ」「…」「今でも、私に黙つて幸さんと会つてたの？」
「まあ、友だちだから」「友だちだから何？」「会つてたよ」「幸さんのこと、まだ好きなの？」
「自分でもわからない」「え？」

「美知子のことときも好きだけど、幸のことも気になる」

「え？ 何、それ」

「俺は二人とも好きなんだよ」

「……広志、私たち、もう、別れよう」

「……」

美知子は電話を切った。

美知子は、窓際から見た一人の姿を思い出した。

——広志も幸さんもおしゃれで、テレビドラマの中の一人みたいだった。

私は、幸さん

みたいにはなれない・・やつぱり、広志とは別れよう——

美知子は、コーヒーを飲み干すと、テーブルに置いてある雑誌を手に取った。そして、さと

うきび刈りのアルバイト募集のページを開いた。

——私は、私のやりたいことをしよう——

美知子は、西表島へ行くことを決めた。

三 再出発

美知子は、一月末で会社を辞めて、二月初め、西表島へ出発した。

西表島は、沖縄本島の南西にある緑豊かな島だ。沖縄本島から飛行機で石垣島に行き、石垣島から高速フェリーに乗つて

四十分くらいで着く。

過ぎだつた。美知子が西表島の港に着いたのは、お昼

い。二月だけれど、汗が出てくるほどの暑さだ。歩いていると、海の匂いを乗せた風が、気持ち良くなついてきた。



どこまでも広がる海と大きな空、緑の豊かな山を見て、美知子は大きく息をした。体も心も元気いっぱいだ。

——気持ちいいなあ——

初めてなのに、美知子は、まるで自分の故郷に帰つて来たような懐かしさを感じた。

次日の日から、さとうきび刈りの仕事が始まった。

一緒に働く仲間は十人。近くの家に住んでいる一人以外、みな同じ宿に泊まっている。朝早く、トラックの荷台に乗り、さとうきび畑へ向かつた。前方に、サラサラと風に吹かれているさとうきび畑が見えてきた。風が強く吹き、雲は、右から左へ、どんどん流れていった。天気が良く、海を見ると、隣の島が青くぼんやり見えた。

さとうきび畑が近づいてきて、美知子は、わくわくした。さとうきび畑に着くと、走つて畑の中に入った。さとうきびは、背が高い。美知子が手を伸ばしても届かない。

——わあ、大きい！　へえ、これが砂糖になるんだ——



いよいよ、作業が始まった。力があつて慣れている人が、畑のさとうきびを刈り取り、その刈り取つたさとうきびの葉っぱを、他の仲間たちが切り落としていく。

美知子は、自然の中で働くいていることがうれしかつた。汗をかくことが気持ち良かった。仕事が終わると、体はくたくたに疲れられた。トラックの荷台に乗つて帰る時、夕焼けが仲間たちの顔を照らしていた。汗をかいたみんなの笑顔が輝いて見える。その中に、笑顔がとてもすてきな青年がいた。それが、壮介だった。

壮介、二十二歳。十人の仲間の中で、近くの家に住んでいる一人というのが壮介だ。一年前から一人で西表島に住んでいる。子どもの時から、自然の中で遊ぶのが好きだった。父親と釣りに行つたり、家族でキャンプをしたりした。高校一年の時、自転車一人旅で、西表島に来た時、この島が大好きになつた。ここにまた来たいと思った。その後、毎年、夏休みも春休みも、西表島で過ごした。夏はパインツリー、春はさとうきび刈りのアルバイトをするようになつた。島の歌や踊りも気に入り、家の近くのおじいさんに教えてもらつていて。

壮介は、仲間の中で一番さとうきび刈りが早くて上手だ。

どんどん、さとうきびを刈つていく。

——壮介つて、すごい！——

美知子が壮介を見ていると、壮介が顔を上げた。壮介と美知子の目が合つた。壮介も美知子も笑顔になつた。壮介の笑顔は、かわいくて少年のようだつた。

美知子が西表島で働き始めて、一週間が経つた。

「いた
痛い！」

烟で作業中、仲間の一人がケガをした。手から血が出ている。

すると、壮介が走つてきた。壮介は、持つていたタオルで、ケガ人の手を押さえた。そして、トラックに乗せ、病院に向かつた。しばらくして、戻ってきた壮介は、「大丈夫。心配ない」と言つて、すぐ作業を始めた。

壮介は、休みの日や、仕事の後、一人でよく海や山、川に行く。西表島は、自然が豊かなので、壮介は楽しくてしかたがないのだ。美知子は、自然是好きだけれど、一人で行く勇気はない。

ある日、さとうきび刈りが終わつた後、美知子は壮介に話しかけた。

「今日もどこか行くの？」

「海だよ」

「私も一緒に行つていい?」

「え、いいよ」

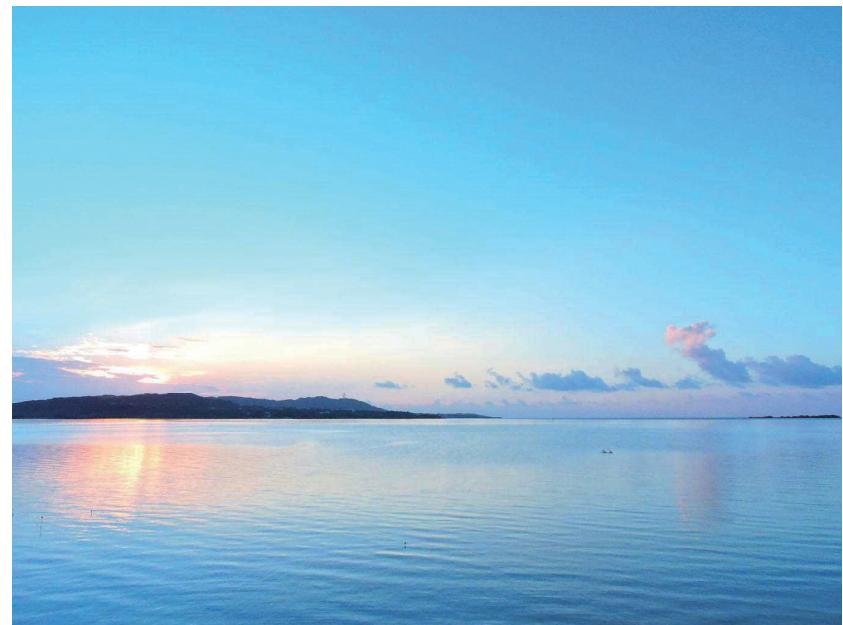
壮介は、ドキドキした。壮介は、さと
うきび煙で美知子と目が合つたときから、
美知子が好きになつていて。壮介は、うれ
しさを隠して、どんどん歩いていく。美知子
が壮介の後を歩いていくと、目の前に、海
が広がつた。オレンジ色の太陽が輝いて
いる。

「きれい! 海がキラキラ光つてる!」

「うん、ほんとにきれいなんだ。それにさ、波
の音を聴いていると落ち着くんだ」

「いつも一人で来てるの?」

「うん」



「毎日、この海を見られたらいなあ」

「うん、俺もそう思つて、西表島に住み始めたんだよ」

「そうだつたんだ。私は、この海を見ながら、野菜を作りたいなあ」

「西表島に住んじゃえば?」

「え?」

「あ、あのね、ほんとに、西表島はいいところだから」

「うん、ずっとといいたいなあ」

「うん、で、煙で野菜を作る!」

「それ、私の夢!」

——本当に美知子が西表島にずっといてくれたら、楽しいだらうなあ——

壮介は、そんなことを思った自分に驚いた。美知子は、壮介の言葉に勇気づけられた。

夕日は沈み、辺りは暗くなり始めていた。

「そろそろ帰ろう」

「うん、壮介、ここに来る時は、また誘つてね」

「うん、そうするよ」

帰る一人は、幸せそうだった。

それから、二人は一緒に出かけることが多くなった。

仲間たちは、言い合つた。

「壮介、変わったよね、女の子と一人で出かけるなんて」

「壮介と美知子、うまくいくといいねえ」

壮介は、好きな女の子には、なかなか気持ちを伝えることができないで、今まで何回か失敗している。壮介は、そんな自分を、そろそろ変えたかった。次に好きになった人には、ちゃんと好きだと言おうと、心に決めていた。

美知子は、西表島に来てから、好きな絵をまた描くようになつた。キラキラ光る海、魚が飛び跳ねる川、木々が生い茂る緑豊かな山、描きたい風景がたくさんある。

その日、きとうきび刈りの仕事は、休みだつた。
美知子は、壮介に会いに行つた。壮介は、庭で、三線を弾きながら歌つていた。
美知子を見つけて、壮介は歌うのをやめた。

「ごめん、歌つてたのに」

「ううん、いいよ」

「壮介、今日は、何かある？」

「ないよ。どうして？」

「私、滝に行つてみたいの」

「一緒に行こうか？」

「いいの？」

「もちろん、いいよ」

壮介の運転する車に美知子は乗つた。車の窓を開けていると、風が入ってきて気持ち良かつた。



壮介は、釣り竿を持つて来ていた。美知子はスケツチブツクを抱えている。滝に着くと、壮介は、釣り竿にエサを付けた。

「壮介、見て！あの石の下に魚がいるよ」

「お、ほんとだ」

壮介は釣り糸を川に投げ入れた。すると、五分も経たないうちに、大きな魚が釣れた。

「壮介、すごいね！」

釣りあげられた魚が、岩の上で、元気に飛び跳ねた。

壮介は、魚をつかみ、網に入れた。

一時間の間に、三四匹釣れた。

壮介が魚を釣っている間、美知子はスケツチした。

壮介は、川の水で顔を洗った。美知子も真似をした。川の水は、冷たくて気持ち良かつた。



壮介は、川原でお湯を沸かし始めた。コーヒーをいれるためだ。

壮介は、コーヒーの入ったカップを美知子に渡した。

「ありがとう」

美知子は熱いコーヒーを一口飲んだ。

「おいしい！」

川が、太陽の光を受けて、キラキラと光っていた。

それから、二人は壮介の家に行つて、釣った魚を料理した。壮介は塩焼き、美知子はスープと煮物を作つた。

「このスープと煮物、うまい！」

「そう？ 良かつた。うれしい！」

「俺、魚は、いつも刺身が焼くだけだったよ」

「でも、私、ほんとは焼き魚が一番好き」

ビールと泡盛を飲みながら、二人はゆっくりと食事を楽しんだ。

壮介は、食べ終わると、また三線を手に取つて静かに歌い始めた。島に伝わる恋の歌だ。

——美知子、俺の気持ちわかつてくれるかなあ——

美知子は、その歌を聴いて胸がキュンとして、泣きそうになった。

——私が好きになつちやつたみたい——

美知子は、もつとここにいたいと思ったけど、立ち上がり言つた。

「壮介、今日は、ありがとう」

「こちらこそ」

「もう、帰らなくちゃ」

壮介は、美知子を宿まで送つていった。

宿まで歩く一人を、夜風がやさしく吹きぬけていった。

四

流れ星

それから一週間経つた。

その日は、数年に一度、流れ星がたくさん見られる夜だった。

——流れ星を見ながらだつたら、きっと好きだつて言える——

壮介は、思い切つて美知子を誘つた。

「ねえ、美知子、流れ星を見に行かない？」

「流れ星！ 行く行く！」

初めての壮介からの誘いだつた。美知子は、踊り出しそうなぐらい、うれしかつた。

壮介と美知子は、車で展望台のある山へ向かつた。

車を降り、寝袋を持つて展望台まで歩いた。

寝袋に寝転がつて夜空を眺めていると、ふいに星がたくさん流れ出した。

夜空に輝く星が、光る線を作つては消えていく。

「うわあ、星がどんどん降つてくる」

「すごいな」



「夢の中に入るみたいだね」
それから、二人は、しばらく無言で夜空を眺めていた。

——壮介のいるこの島にずっといられますよう

——美知子がずっとこの島にいますように——
空を見上げる壮介の横顔を見て、美知子は、涙が流れた。

——やつぱり、わたし、壮介に恋してる——

寝転がっている二人の手が触れそうになつた時、壮介が口を開いた。

「……あのう、美知子、聞いていい？」

「え？」

「え？ うん、いいよ」

「ええとね、美知子は、付き合つてゐる人いるの？」

「え？ ううん、いないよ」
「ほんと？ でも、好きな人は？」
「え、好きな人？ ええと、それは……」
美知子がそう言つた時、美知子の携帯電話が鳴つた。さとうきび刈りの仲間からだつた。
「ごめんね。電話、出るね」

* * * * *

「もしもし、美知子だけど」

「みちこ、友だちが来てるよ」

「え？ 友だち？」

「男の人だよ」

「男の人？ 誰だろう……」

「名前、教えてくれないんだよ」

「わかった。あと二十分くらいで戻るから」

「うん、じゃ、そう伝^{つた}えるね」

「うん、ありがと^う」

美知子は電話を切った。

——誰だろう？ 男の人？ 友だち？ この島に？ ・・・あ！ 広志？ まさか！——

「壮介、ごめんね」

「どうしたの？」

「誰か、私に会いに来てるんだって」

「友だち？」

「名前、言つてくれないんだって。だからわからな^いけど
「そ^うか。じゃあ、宿まで送るよ」

「ありがとう。・・・私、もう少しここにいたかったな」

「また、一緒に来よう」

「うん」
「壮介も美知子も、言い残した言葉があつた。

二人は、もう一度、夜空を見上げた。

急いで戻ると、宿の前に、タクシーが一台停まっていた。

美知子は、車を降りて、走り去る壮介の車に大きく手を振つた。

美知子が玄関のドアを開けると、そこには広志がいた。ソファに足を投げ出して座つてい

いる。

「広志・・・なんで？」

「迎えに来たんだよ」

「迎えに？」

「もう、東京に帰りたいだろう？」

「私、東京には帰らないよ」

「俺、美知子がいなくて寂しいんだ」

「私は、広志がいなくても寂しくなんてないよ」

「幸のこと、気にしているんだろ?」

「幸さんのことなんて、気にしてないよ。そんなこと、どうでもいいの」「じや、なんで?」

「わたしは、広志のこと、もう好きじゃないから」「じゃ、なんで?」

「おれは、広志のこと、もう好きじゃないから」「わたしは、まだ美知子が好きだ」

「私は、この島が好きなの」「わたしは、この島が好きだ」

「こんなところで、何がおもしろいんだよ」「こんなところで、何がおもしろいんだよ」

「もう帰つて!」「もう帰つて!」

「美知子、一緒に東京へ帰るうぜ」「美知子、一緒に東京へ帰るうぜ」

「帰らない」「帰らない」

「無理するなって」「無理するなって」

「本当は、もう帰りたいんだろう?」「本当は、もう帰りたいんだろう?」

「だから、帰りたくないって、さつきから言つてるでしょ」「だから、帰りたくないって、さつきから言つてるでしょ」

「だから、なんでだよ?」「広志、もう帰つてよ!」

「一緒に東京に帰るうよ」「一緒に東京に帰るうよ」

「そう言つて、広志は、美知子に航空券を渡すと、美知子の手を引っ張つた。

そのとき、玄関のドアが開いて、美知子の寝袋を持った壮介が入ってきた。

「美知子、忘れ物」「美知子、忘れ物」

広志は、美知子の手を引っ張つたまま、壮介を見た。

「壮介、待つ!」「壮介、待つ!」

美知子が広志の手を振りほどいて宿の外へ出ると、壮介の車は走り去つていった。

広志は、美知子の後を追つて外に出た。そして、美知子の手に無理やり航空券を握らせ

て言った。

「俺は、こんな汚い所に泊まるのは嫌だぜ。港の近くのリゾートホテルに泊まるよ。美知子も一緒に来れば?」

「汚くなんてないよ！私はここが好きなの！」

「そうかよ。じゃ、俺はホテルに行くよ。明日の朝、港で待っている、来いよ。なあ、一緒に帰ろうぜ。じやあな」

広志を乗せたタクシーは去っていった。美知子は一人、星の輝く空を見上げて大きく息を吐いた。

いた。

次の日の朝早く、壮介は、美知子に会いに宿に行つた。けれど、美知子は港へ行つた後だつた。

——俺、また、だめだつたのか。美知子、俺、美知子が大好きなのに——

気づくと壮介は、走り出していた。港に向かつて走り出した。走つて、走つて、走つた。

ようやく港が見えてきた。

——あともう少しだ——

みなと港に船が停まっている。

——あの船だ——

その時、船が港を出発した。

——間に合わなかつたか——

港に到着した壮介は、息を切らしながら、遠ざかる船を見て叫んだ。

「美知子！みーちーこ——」

壮介の目から、涙があふれた。

「壮介！」

振り返ると、美知子が立つていた。

「美知子！」

壮介は、両手で涙をふくと、少年のような笑顔になつた。

そして、今度はまじめな顔になつて言つた。

「美知子、俺、俺、俺は、美知子が好きだ！」

美知子の目からも涙があふれた。



「壮介、私も壮介が大好き！」

「俺、美知子が帰つちやつたのかと思つたんだ」

「帰らないよ、壮介がいるのに」

「俺、美知子はそう言つて笑つた。

「壮介も笑つた。

「一人は港に背を向けて、歩き始めた。」

「壮介も笑つた。」

「一人は、美知子の手をしつかり握つた。」

「美知子もその手を握り返した。」

五 二人の夢

一週間後の夕方、壮介と美知子は、初めて一人で過ごした浜辺へ行つた。

浜辺で、壮介は、三線を弾きながら、またあの恋の歌を歌つた。

「私は、その歌大好き」

「そう？ 好き？ うれしいよ。俺も大好きなんだ」

歌い終わると、壮介はお湯を沸かしてコーヒーを入れた。

二人はコーヒーを飲みながら話した。

「あのさあ、俺、実は、この島でカフェを開きたいんだ」

「どんなカフェ？」

「景色が良くて」

「うん」

「コーヒーがおいしくて」

「壮介のコーヒーなら大丈夫だね」

「一人でゆっくり本が読めるようなカフェ」

「いいね」

「あと、天井に大きな扇風機を付けたい」

「お！ すてき」

「コーヒーの他には？」

「ビール」
「食べ物は？」

「まだ決めてない」

「じゃあ、カレーはどう？」

「いいね、カレー」
「壯介のお腹がグーと鳴った。

「カレーって聞いたら、カレーが食べたくなってきた」「これから、作ろうか？」

「うん」

「じゃあ、買い物に行こう！」

二人は、カレーの材料を買って、壮介の家に行つた。そして、美知子がカレーを作つた。カレーには、ゴーヤ、ナス、キノコ、ジャガイモ、タマネギ、ニンジンを入れた。

「おいしいね！」

「カフェのメニュー決まりだね」

「うん」

二人でカレーを、あつという間に食べてしまつた。

「わたしも壮介のカフェを手伝いたいな」

「うん、美知子に手伝つてもらえるとうれしい」

「今から、景色のいいところを探しに行こ

うか？」

「うん、行こう、行こう」

二人は、歩き始めた。空には、きれいな星が輝いている。すると、一つ、大きな星が流れ星！

「あ、あれ星！」

「あ、あれ星！」



二人は、顔を見合せた。

「ねえ、壮介、この前、流れ星見た時、何かお願ひした?」

「え? うん、あのね、美知子がずっとこの島にいますようにつてお願ひした。ねが

「壮介のいるこの島にずっといられますようにつて」

星空の下、二人は初めてのキスをした。

*

一年後、二人は結婚して、西表島に小さなカフェを開いた。
壁には、美知子が描いた絵が掛かっている。

カフェの窓から見える海は、様々に変化する。朝の海。昼の海。夕方の海。夜の海。

どの海も、美しくて、美知子は気に入っている。

カフェの隣の烟には、美知子の作った野菜が豊かに実っている。

美知子は、毎日、海を見ながら、野菜のたくさん入ったカレーを作っている。

コーヒーをいれるのは、壮介だ。

景色が良くて、おいしいコーヒーとカレーを出すカフェは、旅人にも島の人にも人気だ。

十一時、カフェを開ける時間だ。
急速、ドアが開いて、お客様が入ってきた。

「いらっしゃいませ」

「コーヒー、一つ」

「かしこまりました」

美知子と壮介の一日が、今日も西表島で始まつた。





この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

【写真】

- 表紙、P.32、P.33
アドビストック <https://stock.adobe.com/jp/photos>
- 上記以外の写真
写真 AC <https://www.photo-ac.com>

みちこ 美知子の星空

はっこう
2020年10月15日発行

おおつか
原作：大塚えみ

ほんあん
翻案：川本かず子

かんしゅう
監修：NPO多言語多読